

まえがき

- 若い人達の元気のない発想に、恐怖さえ覚えた。@海外
- 同様の発想なのに鼻柱の強い娘に意見するため執筆開始。@帰国直後
- 若い人達は、それなりに考えている。日本が崩壊している。@国内
- 自らの生き方を模索しなければならない。@現在

I. 自分の概論

1. 自立と共生

(1) 矛盾

自立とは自ら考えて稼げる人の状態だとすると、社会の中での生き残り競争が生じる。一方でお互いを尊重して共生しなければ、最後はひとりきりの社会になってしまう。共生を重視すれば、競争を勝ち抜けない。この矛盾をどう解決するかが、今日の社会の本質的な課題だと自分は考えている。そして、誰もが「考えなければいけない」と思っていて、且つ「そんなこと考えている暇がない」と思う課題に対して、誰かが蛮勇をもって本質的に継続的に考え発信し行動し続けなければ、この問題は解けない。

自立と共生を並立させるのは、自立した個が、その正義感を以って共生の成立に挑み続けるという構図になるのであろう。

—余暇をどう楽しむかを悩む時代—

(2) 日本の現況

かつて日本人は集団性が高いと言われてきたが、戦後は集団性の崩壊の歴史なのではないかと考えるところである。高度成長は、農村から都会へと人々を移動させ農業は儲からないものとされ、職住近接の環境は都会にはなく、家族という集合も良くわ分らないものになった。その結果、人としての挟持・リーダーシップ・人への思いやり等が減衰し続けている。個が確立していない中での集団性の低下が今日を招いていると自分は感じている。

今や、勝ち組・負け組を超えてコンプライアンス経営等という概念がまかり通るようになった。法で縛らなければ人間は碌でもないことをするという、今日の猿山のボス猿の思想だろうと考える。報連相も然りである、ボス猿を満足させるために作られた、きらびやかな報告書に中身はない。

「金が全て」だと口にする人に問いたい、そうだとすると、最終的には金のためなら嘘をついても良いということになってしまう。「嘘つきは泥棒の始まり」というが、集団を構成する者の殆どがそうなれば、社会が壊れてしまう。

正しいと思うことも言わず、不条理なことに「おかしい」とも言えず。生きていて、何が楽しいのかと思うところである。

—農業が人の営みの基礎—

(3) 現状打破のために

法の上には、世間一般の意識或いは社会規範・通念が存在するはずである。ここが曲がってしまえば、法の支配等という概念はひとたまりもないことは今の日本を見れば嫌でも理解出来る筈である。

現状打破のためには、現在の「知りたくない」環境の中で自らの意識を再編成しなければならない。そういった強い危機感を自分は持っている。

同時に、自らが何かを実践して結果を見せなければ世の中に、何の変化も起きないであろうことは想像に難くない。

残念ながら人は利害関係、損得を意識した時に、初めて真剣に考えるものである。現状の閉塞感は、誰もが短期的な利害を追求した結果であり、斯様に殺伐とした世界が出来てしまったことと底で繋がっている。

最早、少しでもいいから、別世界を作るしか道は残されてはいない。武士道・アドラー哲学・ピケティを読んでも何も変わりはない。実践あるのみである。分析・評論・批判だけでは、変化は起きない。

—義を見てせざるは勇なきなり—

2. 柵の破壊

経済環境が意識を醸成し、意識が人の行動を規定する。「赤信号、皆んなで渡れば怖くない」という言葉が流行ったのは1980年、どうやら現在の日本の空気なのであろう。完全な思考停止であり、グローバリズムの進展と行き詰まりの中で、人々は茹で蛙状態になっているものと思われる。

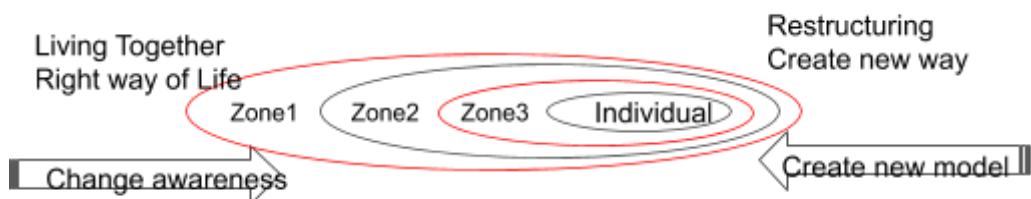
高度成長を知っている世代にとっては、余り深くも考ないまま、ひたすら勤勉に生きてきたということを揶揄したものであり、皮肉ったものであった。と同時に、現下の状況を招いてしまったという反省から逃れようとしているように、自分には見えている。

バブル以降の世代にとっては、行くべき道が見えない中で先達が築いた資産の残骸に縋って生きるしか道がない、且つ、時代に合わせて生きると何時か殺されるのではないかという不安とに恐れ慄いているのだろう考える。

共生という「あるべき姿」と個人の行動の間に、柵が出来てしまって発想が柵の中に閉じ込められていないか、環境の変化に対応出来ているか、思考停止に陥っていないか。お金の多寡で意思決定し、行動がブレる自分がいないか。

日本の常識は世界の非常識である。目を覚ませ、全体構造を想定しなければ、井の中の蛙である。

Living Together	Competition			
Right way of life	Zone1	Zone2	Zone3	Zone4
・Justice	Capitalist	Manager	None Regular Employees	Indeividual
・Equality	President	Operator	Younger Generation	
・Fair				
・Dream	Going Concern	Productivity	Motivation	
	Short-term profits	Meism, Living in the moment, Mammonism		



イメージ

Zone1	資本家、経営者	労働者を材料として扱う、世襲、短期的利益、金、金、金
Zone2	管理者、スタッフ	隷従、報連相、人材育成の欠落、非正規いじめ
Zone3	非正規労働者、若年層	完全思考停止
Zone4	個人事業主、山小屋ニート	柵から出る、世間の冷たい目

過労死という普通でない、普通に起こり得る現象は、柵の中の「今だけ、金だけ、自分だけ」という意識がもたらす現象の内の典型的なものである。正義感に基づき、自分で考えることが出来れば起き得ないことである。

(1) 意識を柵の外に置く

先行きが見えない社会の中では、損得優先、不当な叱責、妬み、嫉み、蔑みの嵐に耐えて生きなければならない。まずは自らの意識を柵の外に置いて、他人をサファリパークの中の動物だと思えば腹も立たなくなる。

自分が正しいと思えなければ、人生が辛いものになるのは必然である。従って、柵の中で起きている事象をつぶさに観察しよう。それは長期視点に立って自らの生き方を考え、やりたい事を自分で創る準備作業である。

(2) 自らの存在を柵の外に出す

柵の外に置けば、見えるものは更に広がってくる。本質が見えれば、柵の中の良い所も悪い所も理解出来る。柵の中には、猿山のボスがいる。このボスがまともでないから不条理は発生する。柵の外に出て歩いてみることで、人と触れることで違う世界が見える。解決したい課題が見えてくる。

(3) 自らを創造する

柵の中でしか生きられないと思い込んでいる自分を再発見出来たのではないかと思う。サファリパークの中で、自らの意思を消し去って生きるか、自らの意思で行動するかを選択である。結論は「金が全てではない」世界を自分の中に創るということである。

一囚人のジレンマ

Ⅱ. 個の確立

所
中

明治以降、高度成長の時でさえ、個の確立がされなければ将来が危ういと叫ばれていたところである。人間は、物理的に一人一人、別物であり、生まれる時も死ぬ時も一人である。ところが日本人は、帰属欲求が強い。「どこそこの会社の某です。」という自己紹介に、それが現れていると指摘されるところである。そして、属する集団に序列があり、それが自らの社会での立ち位置となる。さらに集団の中に序列がある。故に、序列の中でしか物事を考えられないというものである。

日本人は依存することによってしか、生きられないという説もあるようだが、もう一度、個の確立について考えてみる必要ありと自分は考える。日本人の強い同調圧力の中で、長いものに巻かれ続けられれば、自ら考え行動出来なくなるのは必然である。

一個人は社会より先に存在する。一

1. 個の確立とは

(1) 何故、生きているのか

自らの存在を否定して生き続けることは出来ない。その上で正義とは何か、良心とは何か、物事の本質は何か、もがき苦しみながらも考える、行動する。それが生きているということだと思う。

一方、柵の中では他人の指示で、地面に穴を掘らせられて埋める。この繰り返しが行われていると、人は気が狂う。まさに、「存在の否定」である。

同時に、舐められてはいけない。突っ張るべき時は、身体を張って自らを主張・行動しなければ、個は萎れてしまう。人間も動物なのだから。

(2) 美意識の再興

日本人の死生観は、飛鳥川の淵瀬であり、散りゆく桜なのであろう。今日では、多くの金に執着し我慢して長生きを目指しているように自分には見える。潔さとは何か、勤勉、長幼の序、謙虚、譲り合い等の日本人の美德は雲散霧消してしまった。

「日本人なら分かるだろ」と言う人がいる。自分自身も日本人と外国人の違いを感じる時がある。普通の日本人という曖昧模糊とした概念が、そこにはある。大和魂を説明出来る日本人はいるのだろうか。

「恥の文化」は米国人が定義したものであり、「武士道」はクリスチアンの日本人が外国人に日本文化を説明したものである。確かに、日本人の良さはある。それが何かを再定義することが、美意識の再興になるものと考えている。

(3) 自己抑制の習慣

Do unto others as you would have others do unto you. (自分のして欲しいように人にもせよ) は欧米人の黄金律とよばれる道德の根幹である。

「己の欲せざる所を人に施す勿れ」 (論語)

「人様に迷惑を掛けてはいけない」と躰けられている日本人は、自己抑制の回路を子供のころから意識の中に埋め込まれている。お上という意識は、陰で

は批判するものの、最後はお上に従い、頼ることである。水戸黄門を見て喜べるのは、そういうことである。

(4) 覚悟

ある日本語が超堪能な英国人に「覚悟」は英語では何かと尋ねるとPreparationと返って来た。どうやら覚悟は仏教から来ている言葉のようだ。

意識は言葉によって定義され、言葉によって意識は規定される。覚悟という言葉に、日本の未来を託したいと自分は思う。

(5) 我以外皆我師

人間が考える葦であるならば、苦悶は生きている証である。

考える材料は、世の中の何処にでも転がっている。構造はどうなっているか、自分は何者か、目的は何か、問題発見、着眼点、或いは、人が困っていることを見つけることで、やるべき事を見つける。こういった視点で深く物事を見れば、道は開ける。

(6) 自分探し

大谷翔平氏、藤井聡太氏のような才能を、或いは看護婦さんのように使命感を若くして持てた人は別として、遍く多くの方はモラトリアム人間として生きているのだと思う。

自分の好きなことを仕事にして生きていければ幸せである。さらにお金を手にすることが出来れば至福の人生であろう。

自分の好きなことは、自分の中にあるのか、外にあるのか。自分の場合は試行錯誤の末に外に見つけた。死ぬまで、人生の目的を考えることを前提にすれば納期はない。簡単に見つかるものではないと覚悟すべし。

学校で習った知識は、実社会では役に立たない。無いよりは、有った方が良いという程度のものである。知っていることと、課題が解決出来るということは、全く別物である。自らが没頭出来る課題を見つけることが自分探しの本質である。

—人生とは、その目的を発見する作業である。—

(7) 自身の能力

- ・意欲： 何かを成し遂げたいという思い。
- ・知識・知見： 失敗こそ師なり、経験しなければ知識のみに終わる。
- ・人間性： この人と一緒に居たい、何かをしたいと思わせる力。

(8) コミュニケーション能力

先ずは、自分が何を考えているか知り、それを表現出来ること。

(中身×表現力=伝わるモノ)

伝えたいことを理解させるには以下を念頭に置き日々鍛錬することである。

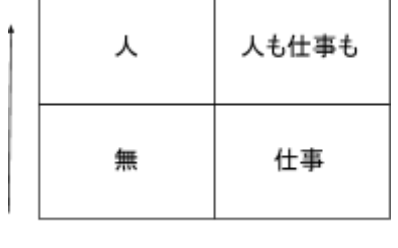
・傾聴

人は聞きたいと思っていること以外は聞いていない。ボクシングで言うジャブを打った跡は、兎に角、聴く。これは相手が何を考えているか、相手との距離感を測る作業である。

(9) 人か仕事か

いて行くべき人を見つけるか、仕事の専門性を磨くか、若い内は自分も悩んだものである。

優れた上司に就けば、仕事にも恵まれる。一方で煩わしい人間関係は、さておき専門性を磨けば、おのずと結果はついてくる。



人	人も仕事も
無	仕事

これは、人それぞれの個性による選択であろう。

人だけに着眼点があるとヒラメになりがちだし、仕事だけに拘ると予算がつかず大きなことは出来ない。結局のところどちらも扱わなければいけない。

管理者ともなれば、人心を掌握しなければことは、事は成就出来ない。よって最後は人となる。

一人は仕事を通じて成長するー

2. 個人としての旗

(1) 自分という実験材料

たいした才能がないとは言っても、自らが自分という実験材料を資源として、今思う夢を満足水準を目的として、見て考えて行動し、知見を磨けば次の満足水準が見えてくる。

長いものに巻かれて我慢して生きていける時代は終わってしまった。自分の変化を楽しむ時代が来ている。

一身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれー

(2) 商品は自分

悲しいかな優しいだけでは生きていけない。誰かを満足させる商品を提供できなければ存在価値を問われてしまう。

① 何もない

商品足るものがなければ、探せば良いし、作れば良い。大事なことは、出来ない理由の分析でない。出来る理由の発見である。

② 見つける、③ 磨く、④ 戦う、⑤ 継続する。

(3) 2 : 8 の法則

パレートの法則とも呼ばれるこの法則は集団の2割の人間によって8割の成果が生み出されるというものである。蟻の法則では、2割の働き蟻と6割のついていく蟻と2割の働かない蟻で集団が構成されている。同時に働き蟻のみを抽出して集団にすると、やはり2 : 6 : 2の比率になるとされる。自らの周辺を見渡せば、何となく納得出来る法則である。

一鶏口となるも牛後となるなかれー

(4) 人を動かす

個の旗を立て、やるべき事が深く広くなると全てを自分で賄うことは出来ない。「してみせて、言って聞かせて、やらせてみせて、褒めてやらねば、人は動かじ」が人を動かす基本であるにしても事は簡単ではない。何故なら、人それぞれ知識も経験も実現したいこともことなるからである。マズローの欲求5段階説が論ずるように、生理的欲求を求めている人に名誉が得られると言っても動きはしない。同時にマクレガーのXY理論を考える必要がある。人と接する時は、相手を徹底的に善として扱い信頼感を高める。そして、その背後では、悪行を行わないか観察する。この両面を見ないと足元をすくわれることがある。一人にものを教えることはできない。自ら気づく手助けができるだけだ。ー

(5) 完璧主義は行動を阻む

じっとしてはいられない、動くしかない、しかしして動けない。唯一無二の人物足りうるのか、余人を以って代えがたい存在であり、かつ全ての人を幸せに出来る能力を持ち合わせているのか。完璧でなくても、動くを基本にしなければ何も前に進まない。

一善人の沈黙ー

(6) 苦難の量が人格を作る

今、自分は身体の不自由な人を抱きしめることが出来る。若い頃には想像のつかなかったことである。また一方で今だ、不見識な輩に喧嘩を売られれば、必ず買うことにしている。更なる自分を待っている苦難は、この自分の方針を変えるのだろうか。

(7) 意識は疲労する

根をつめて考えると意識は披露するが、脳は疲れない。故に酒を呑んで眠れば翌朝には、何らかの答えが出て来る。

一諦めないで思い切り寝る一

(8) 道を譲る覚悟

誰でも楽をしたい、自分の仕事の質を高めたい、だから更新に仕事を渡していく。ところが事の成否の鍵となる事項については、伝承されないことがある。失敗を恐れるからである。失敗自体を伝承する覚悟がいる、目をつぶって任せることも一興であると考ええる。

(9) 行動原則

- ・自ら発信する：考えたことを、他者に発する。
- ・継続は力なり：毎日、誰かに発信する。
- ・作品を残そう：考えたことを論理的に整理する。

Ⅲ. 共生の実現

人は、最後の一人になっては生きていけないし子孫も残せない。生存競争も度が過ぎると破滅を招く、即ち「今だけ、金だけ、自分だけ」といった考え方では人類の未来が開けない。人のために、人が行動出来る環境が、共生であり共同体である。

封建社会	農村	地域・地縁を守るための共同体、豊かさを求めて農民が都会へ流出したことで崩壊、古くからのしきたり・掟・閉鎖性もその要因。
	家族	親族の血縁を守るための共同体、核家族化、距離による疎遠化により崩壊。家父長制が嫌われたことも要因かも。
工業化社会	会社	戦後の経済成長により、発生した共同体。日本的経営が通用した右肩上がりの時代は終了し、人々がその人生を依存出来る共同体ではなくなった。（背に腹は変えられない）
次なる共同体	楽縁	志を同じくし、金に縛られず、人生とは何かを深く考え行動する共同体。（この人と一緒に居たい、何かをしたいと思わせる力を持つ集合）

農村も家族も崩壊した。それは、経済的豊かさのために会社という共同体に移り住むために、捨て去られたのかもしれない。

会社という共同体が、機能しなくなった今、次なる共同体は何に共生の根拠を求めるべきかという問題である。

供給過剰と過当競争と利潤確保の困難性が、恒常的な状態となっている。社会の分配の仕組みを変えなければならない。政治の世界ではベーシックインカム導入の検討が必然なのであろう。

本来は「余暇をどう楽しむかを悩む時代」の到来を告げるべきAIの進化は失業の時代を予感させるものになっている。

次なる共同体は、利害・損得ではなく。生きる喜びを共有出来るものにしたい。

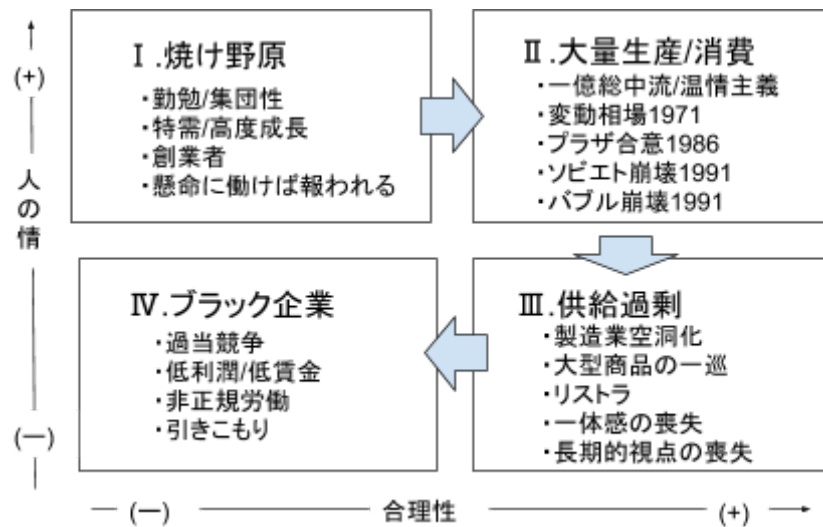
1. 日本的経営の変遷

戦後の日本の共同体は、会社が企業には、経営理念として「共生」を掲げているものが少なくない。この経営家族主義が「わたしの会社」という意識を生み、焼け野原からの高度成長を生み出した。

一方で都会への人工流出で農村は疲弊し、職住近接はで消滅したことにより、家・家族という共同体も崩壊した。

高度成長は、幾つかの僥倖と、有能な創業者と集団性の高い労働者の一体感によって運営されていたものとする。一体感とは日本人の持つ情によって機能する、共同体の蝶番（ちょうつがい）のようなものである。

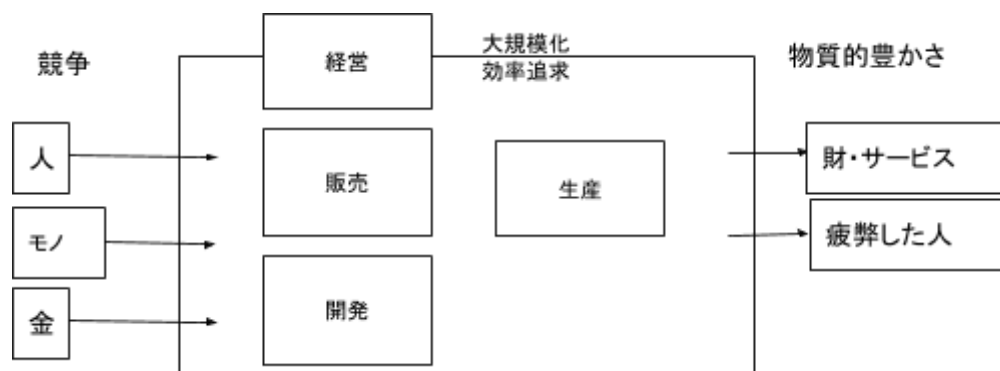
マーケットが成熟し、供給過剰の時代に入れば利益率は低下し、競争は激化する。企業内の一体感は失われ、当然帰属意識も失われる。



人情とは人に対する寛容度であり、「情がうつる」というのは「弱きを助け、強きを挫く」と相通じるものとする。

2. 日本的経営の変質

日本的経営の本質は、従業員を育て会社の発展を目指すものであったとする。現状は、疲弊した人を作り出すという副作用のみが機能している。



(1) 大量生産/消費

低コストによる商品・サービスにより、世の中を豊かにするものである。一方で、合理化・効率化は、人間を疲弊させるものでもある。

(2) 経営

焼け野原から立ち上がった創業者の魂が、2代目、3代目ともなると希薄となって行く。株主重視の経営は、「私の会社」という幻想は崩れ去り、ステークホルダー（利害関係者）等という概念を持ち込めば、従業員の貢献意欲は水泡と帰す。そして、人材は枯渇する。

(3) 販売

供給過剰の中で、財・サービスの提供を無理に行うことになれば、売るためだけの営業は、心が曲がってしまう。

(4) 開発

最早、大型商品の開発は困難な時代となっている。と同時に短期的利益の追求で、開発者も疲弊し新たな技術は生まれず、技術者は流出する。

(5) 生産

現場は、非正規従業員となり、技術基盤はデジタルの時代に移行してしまった。現場の士気あがろうはずもない。蝶番（ちょうつがい）となるキーマンになりたいと思う従業員はいない。故に、品質事故が多発し、人材からスキルが失われる。

(6) 分配・労働時間・職種転換

経営は、需要の縮小、株主からの要求に従い。労働分配率を引き下げ、長時間労働を押し付け、職種転換ではなくリストラを断行している。

(7) 今後起きること

雇用される側がここまで蔑ろにされれば、生産性の低下は避けられない。まともな経営が出来ない奴隷組織が30年以上も生き永らえることはない。

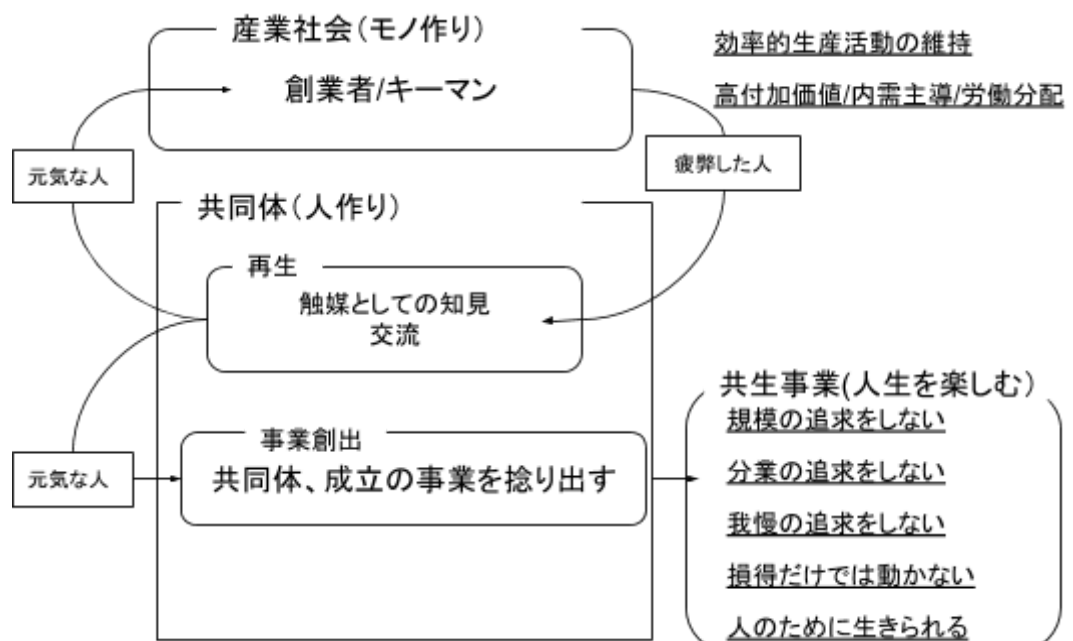
3. 共生実現のためのスキーム

人のために、人が行動出来る環境が、共生であり共同体である。子孫を残すための仕組みが共生の本質である。同時に、「弱きを助け、強きを挫く」という理念を持った人間の集合で構成された共同体を作りたい。

高度成長を背景に、一億総中流と言われた時代があった。その頃、一億総白痴化という言葉もあり、社畜という言葉も作られた。社畜とは個では意思決定しない人々だと思ふ。用意されたコースに乗っていれば、生きていけた世界である。

時は過ぎ、マーケットは飽和状態となり円高に拍車がかかれば、コストダウン競争が激化し、社畜は「積極的隷従」の世界に取り込まれた。冒頭に述べた柵は、金に縛られた価値観において、より高く深くなるであろう。然るに、共同体の破壊された惨状を回復するには、「金が全てではない」と言い切れる個の存在がなければ共同体の復元はない。

(1) 共同体の復元



工業化社会の中核とした産業社会は物質的な豊かさをもたらした。その一方で、規模の追求、効率化のための分業の追求は同時に労働者の疲弊をももたらした。新興国の台頭により競争の激化もあるが、本質はプラザ合意以降の円高にありと自分は考える。円高克服のための、極度の合理性の追求にあると考える。

高い雇用吸収力を持っていた工業化社会も、円高・グローバル化・デジタル化の進展により、モノ作りは人作りという人材育成機能は失われ、「私の会社」という共同体は幻想と化してしまい、懸命に働けば報われるという意識も消失した。

つまりは、個の確立から始めなければ共生も有り得ないというのが現状であろう。人を育てるための基盤としての共同体を作りたい。その機能は、再生及び事業創出で構成される。

(2) 再生

産業社会から輩出される財・サービスを消費して人々は生きている。産業社会を全否定することは出来ない。経営者或いはキーマンが、行き詰まった組織を、内部から人間優先の組織に変革することが求められる。

世にいう閉塞感とは、産業社会の行き詰まりのことである。物質的な豊かさを供給出来る産業社会を維持するには、人を中核とした価値観を、個々の企業体に植え込まなければならない。

その志を同じくし、金に縛られず、人生とは何かを深く考え行動する人々の出会い（楽縁）の場を作りたい。志・気概をもった人間が楽しく議論し、産業社会を内部から再生する、そんな元気な人を排出するリアルな場を作りたい。

(3) 事業創出

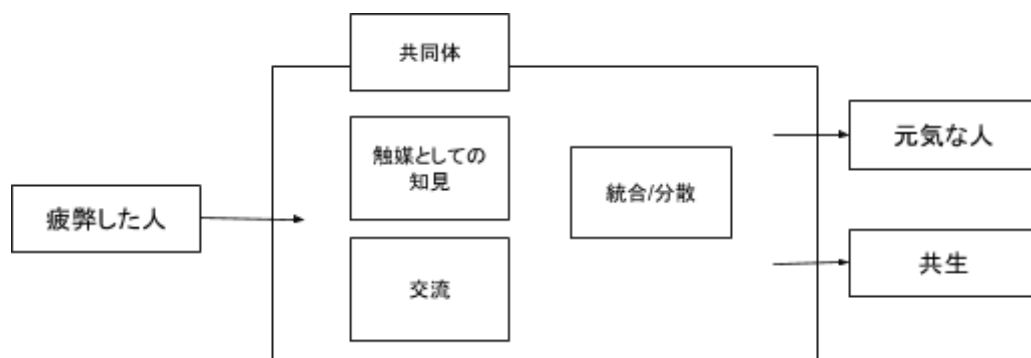
人生が楽しくなる価値観を創出、捻り出す作業である。価値観に対する満足度を対価とする事業を生成する。共同体が生産するのは喜びである。

さりとて「武士は食わねど鷹楊枝」とも言っていないので、物質的豊かさを追わず、精神的豊かさで代替するという姿勢が求められる。

(4) 自分の思いつくテーマ

自分の強みは、異文化対応・マネジメント位しかない。恥ずかしながらあるのは思いだけである。

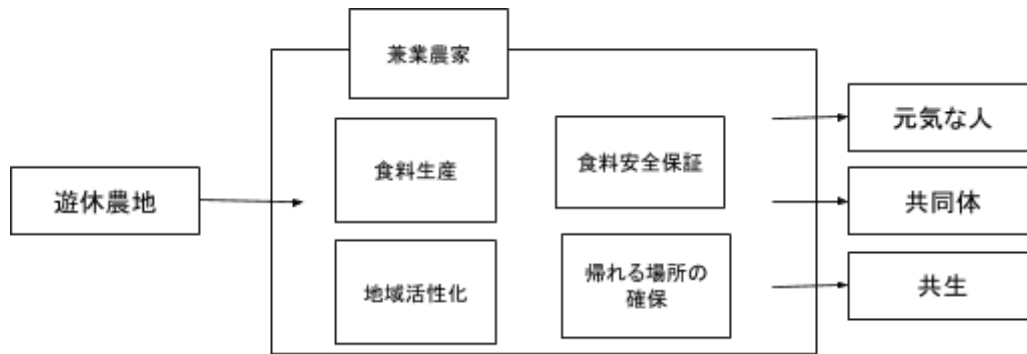
① コミュニケーションの場



目的	場の提供、触媒としての知見の提供、議論、元気。
事業形態	スナック、貸会議室、喫煙所等

※ スナックは、ママの人間性に対価が支払われている。異文化融合もこれに近い考え方で実現出来ると考えている。

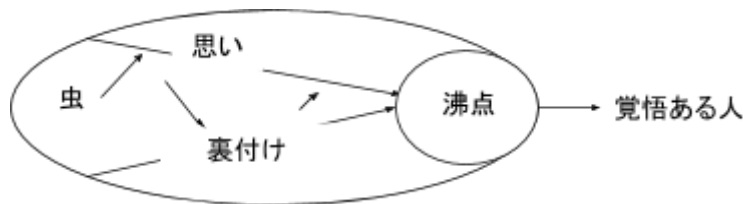
② 兼業農家（自給自足）



目的	兼業農家の復権、自己決定権の確保。
事業形態	遊休農地の活用等

(4) 沸点

思いを行動に移す時点は、何時やって来るのだろうか。臆気な自らの思いの確からしさの検証は沸点に到達するまで繰り返される。



迷いを振り切って行動するには、利害を超えて「金

では動かない、志で動く」という価値観を思い起こすよりない。何故なら、100%成功する行為そのものは、さしたる価値のないものだから。

強い思いがあり、技術的基盤の裏付けがあり、社会が受け入れてくれる見通しがあれば、覚悟と行動あるのみである。

あとがき

- 資本主義の終焉が、現実のものとして近づいてきている。
- 老いも若きも、思考停止に陥っている、知恵を出し行動する時である。